

## JSN オランダ連携プロジェクト 「Game Changer ～パラスポーツで社会を変える～」事業報告

事業名	障害者と健常者をつなぐ指導者の役割を学ぶ
日時	平成 30 年 6 月 28 日（木）午前 10 時から午後 5 時まで
場所	保谷柳沢児童館、東京都立田無特別支援学校
事業関係者	リタ・ファン・ドリエル 氏（オランダオリンピック委員会・スポーツ連合） マヨライン・デ・ブーア 氏（スポーツコンサルタント） ドルフ・ナイブルック 氏（オランダコーフボール協会） ハーバート・ウルフ 氏（オランダオリンピック委員会・スポーツ連合） ヴァンデルヴェーレ・アノーマ 氏（ライデンアジアセンター研究所） 日本スポーツ振興センター 辻 寛之 氏、山本 周平 氏、山田 悦子 氏、久保田 潤 氏
目的	オランダにおける障害者スポーツのプログラム、スポーツの要素を取り入れた健常者と障害者の相互理解の手法について体験を通して学ぶ。
参加者	大人 62 人（児童館・学童クラブ、地域スポーツクラブ、体育協会、スポーツ推進委員、小・中学校、スポーツ審議会、放課後等デイサービス、指定管理者） 子ども 50 人（児童館、学童クラブ、放課後等デイサービス）

### ◆ワークショップ 10：00～12：00 （保谷柳沢児童館）

#### □視覚障害者の体験

- ・ 2人1組となり、1人が視覚障害者の感覚が体験できるゴーグル（視野を遮るゴーグルの中央や上の方などに穴が開いており、度合いの異なる視覚障害を体験できる）を装着し、もう1人がガイド役となって、児童館内を歩いた。

#### 【リタ氏】

ガイドの人を見ていると、様々なガイドのやり方があった。指導者側の皆さんは、ガイドをされる人に、どのようにやったら良いか聞いたことがあるか。視覚障害者の人を引っ張ってガイドすると余計に不安になる。また、建物で移動しやすくするにはどのような工夫が必要か。



## □映像視聴

100kmのダウンヒル、視覚障害者のマラソンの映像

### 【マヨライン氏】

視覚障害者のガイドは、障害者と一緒に安全な場所で、手をつないだり、緩めの紐を持って一緒に走ったりして、ガイドの方法を試している。個別のニーズに対応してスポーツをする。

## □プレゼンテーション

### 【マヨライン氏】

- ・誰でもゲームに参加できるように、考えて、常に実践して、変更すること。参加者が学んでいるかを見ながら、簡単すぎてつまらないということがないように、できるかできないかぐらいのチャレンジのレベルで行う。また、ゲームを作る子どもたちの話を聞いて幅を変える。
- ・装備に改良を加える。家庭や学校にあるもので、腕を伸ばすために断熱材のスポンジや、古着、プラスチック定規などを使う。



## □障害者がスポーツをしている写真を見てディスカッション



### 【リタ氏】

#### 「リオで出会った車椅子の子どもの写真」

パラリンピックのトライアスロンを見た車椅子の男の子が、銀メダリストにもらったぬいぐるみを抱えている。この出来事にこの男の子がどれだけ感激したことか、インスピレーションを受けたことか。

2020年のパラリンピックでも、このように希望をもらい、自分もやってみたいと思う子どもをみなさんに受け入れてほしい。そのためにオランダから私たちがいる。



#### 「みんなでフリスビーをしている写真」

健常者と障害者が一緒にフリスビーをすることは、コーチにとっても初めてだったが、躊躇なくできた。子どもたちが協力し合って楽しんだ。ルール、規則、コートなどにとらわれず、まずはやってみて楽しんでみることに。

### 「ひざから上だけで柔道をしている写真」

どんな障害でも関係なく柔道ができると読み取った参加者もいたが、車椅子に座っている人も車椅子から降りて参加できるのではないかという考えではなく、彼女にどうすれば参加できるかを聞いてみるべき。

### 「段差のあるところで車椅子の練習をしている写真」

車椅子の子どもたちがスポーツをするには、自分の車椅子を自分でしっかり操作できることが第一条件。子どもにセッションをするときは保護者にも訓練し、子どもたちは思っているよりもすごいことができることを見せている。



### □コーフボールの映像視聴

#### 【ドルフ氏】

- ・スポーツでの成功体験をすること。
- ・コーフボールは、ボールを1つ持ち、奪ったり、奪われたりがないので、障害者のスポーツに適している。



### □MEEに関するプレゼンテーション

#### 【マヨライン氏】

- ・2020年までに国民みんながスポーツをするために、障害者を受け入れる時に何ができるのか。自分たちのプログラムをニーズに合わせていくのか。どのように参加者を見つけてくるのか。すべての要素を結びつけ、調整する仕組みづくりが必要。
- ・オランダの「MEE」は、仕事、生活、教育を通じて、社会に参加する仕組み。MEEには、カウンセラー8名が在籍し、個人やスポーツクラブからの問い合わせに応じて、アドバイスをしている。面談では、何ができるのか、何をしたいか、スポーツの環境なども話し、どこのスポーツクラブ、スポーツ環境が一番適正かを考える。また、カウンセラーが障害者と一緒に施設に行き、運営者の話やスポーツクラブの工夫をヒアリングしたり、アドバイスをする。情報提供を受けることは、次の問い合わせのときの情報収集になる。

### □参加者からの質問

Q 障害者が、能力を活かしてスポーツをしたいという気持ちがある一方で、恐怖がついてくると思うが、どのように対処するか。

A どういう傾向で恐怖がついてくるか、当事者の話を聞くことで恐怖が溶けるものである。不安や恐怖よりも、自分にはできるという確信にすることが大事。指導者との信頼関係が築ければできる。障害ではなく、可能性に目を向け、クリエイティブに。

## ◆コーフボール体験授業 13:30~14:45 (東京都立田無特別支援学校)

□3年生喫茶班による喫茶サービス、オランダに関する質問タイム

### □コーフボールの授業

#### ・準備体操、コーディネーション

- ・ボールを身体の回りでぐるぐると回す
- ・ボールを上へ投げて、その間に拍手を3回する。全員ができたところで、次に拍手を6回に増やす。
- ・6回拍手を成功させるためにはどうしたら良いか、ドルフが生徒に問いかけると、拍手を早くするや高く上げるなどが挙がり、生徒は挑戦した。



#### ・シュートの練習

- ・6人ずつのチームに分かれてシュート練習。
- ・1分間でどちらのチームが多くゴールを決められるかを競争。1回毎に回数を確認し、最後に「2回戦やって、みんなまで54回もゴールができた。」とコメントした。
- ・「どうしたらゴールに入ったか。高く投げるか、それとも低く投げるか。」を生徒に確認した。ゴールしたら、ドルフとハイタッチして反対側のゴールにシュートするアレンジを加え、全員で何回ゴールができるかに再度挑戦した。



#### ・コーフボール

- ・6人对6人のゲーム形式で実施。実際は4人对4人だが、純粋にコーフボールを楽しんでもらうために、6対6で実施。
- ・ゲームの最中に、「特別ルールとして、ゴールの背後から投げたシュートが入ったら3点にする」とドルフが話すと、生徒たちはゴールの背後に回るようになり、360度どこからでもゴールができるコーフボールの特徴を生かしたシュートが増えた。



#### 【ドルフ】

- ・ルールが大事なときもあるが、ルールが全てを決めるわけではない。スコアリング・成功体験・楽しむことが大切であり、生徒ひとりひとりがゴールをすること、楽しむことを中心に行う。
- ・生徒たちがより良くするために考えられるようになった。テクニックは教えていないが、ゴールの数が増えていった。子どものやる気を引き出す方法を実践できた。コーフボールをやり続けると、変わっていく。

## ◆交流プログラム 15:00~16:30 (保谷柳沢児童館)

### □3チームに分かれてボールを使ったミニゲーム

#### ・ドルフチーム

ボールをタッチする鬼ごっこ、児童館の遊具（四角いブロックに周囲に丸い穴が空いている）を使ったリレーゲーム

#### ・リタチーム

バスケットボールを児童館の遊具に入れるリレーゲーム。児童館のブロックに上からボールを入れて、落ちてきたボールを次の人へ渡すリレーゲーム。1段ずつブロックを積み重ねていく。

#### ・マヨラインチーム

床に座って足を広げてみんなで大きな円を作り、ボールのパスをするゲーム。



### □みんなで動物のまねをする

ドルフ氏の「日本の動物を教えてください」という質問に対し、子どもたちが元気よく答え、ドラゴン、ネコ、ゴリラになりきった。

真似をする時のルールは、児童館の床に貼っているラインの上だけを移動すること、声を出さないこと、立ち上がらないこと。



### □歌を歌う

全員で長座で英語の歌を歌った。



### □指導者と懇談

#### 【指導者からの感想】

- ・遊んでいる内容はシンプルだが楽しめた。
- ・オランダから来ていることが子どもたちの刺激になった。
- ・健常児と障害児一緒に遊ぶのはなかなかなかった。
- ・障害児のテンションが高く、笑顔が多く、遊びの引き出しになった。

#### 【オランダの専門家からの助言】

- ・遊びは、グループに分けて、目が行き届くように、小さいグループで定期的にする。



- ・動物のまねや、歌を歌ったのは、クールダウンであった。いつも最後に歌を歌うと、もう終わりの時間だと子ども自身がわかるようになる。
- ・部屋の片隅にマットなどを敷いた休憩コーナーを作り、テンションが高くなった子どもがいたら休憩を促す。テンションが高いことを罰するのではない。何回かやると自分で休みに行くようになる。

## ◆リタ氏より講評

### □参加者

- ・プロジェクトを進めるために必要な人たちが参加していたことが良かった。

### □ワークショップ

- ・テーマに興味を持って集まった人たちだった。障害者と日頃から接している人やプログラムを提供している人など異なるセクションの人たちが集まっていた。
- ・ゴーグルアクティビティとして行った視覚障害者の体験では、様子を見ていたら、ゴーグルを装着すると、固まって立っている人がいた。他ではガイドが無理に動かす例もある。当事者と話さないで手助けを始めたことは本当に良かったのか。障害者をすぐに助けるのではなく、一人の人間として接することの大切さを体験できる、1日の始まりとしては良いプログラムで、体験を通してテーマを伝えられた。
- ・プレゼンテーションや写真を見ながらディスカッションをするところは生き生きと対話ができて良かった。

### □特別支援学校

- ・特別支援学校の喫茶班の実習は勉強になった。オランダの質問がとても良かった。カフェのアンケートがオランダ語になっていた。生徒だけでなく先生方も心を込めてくれた。
- ・コーフボールのデモンストレーションを特別支援学校ででき、良いものであることを見せられたのは良かった。

### □児童館交流事業

- ・児童館での交流事業は、子どもたちがとてもエネルギッシュだった。オランダのデモンストレーションを体現できた。
- ・状況を見て、その都度遊びやルールを変えて工夫した。その結果、子どもたちは楽しんでおり、いつもとは違う体験ができた。
- ・もっとインストラクターと話したかった。インストラクターが普段やっていることと違ったと思うが、交流できて良かったと言っていたので全体を通して、良かった。

## ◆参加者アンケート（抜粋）

大人（回答 20 人）

1. 事業に参加する前と参加した後で、障害者スポーツに対する意識や考え方、知識や技能に変化がありましたか？

変化があった（18 人）

- ・障害者スポーツにどのように関わっていけば良いのか知識がなかった。研修に参加して、本人と話して何が出来るかを聞くことが大切。障害に目を向けるのではなく、可能性に目を向けることが大事だと思った。
- ・意識、考え方の始点（視点）が今までは自分の思い（思い込み）が先行していて、ある意味自分本位で相手の気持ちを考えていないことだったと気づいた。知識・技能についても詳しく教えていただき初めの一步になった。
- ・参加前は、障害者とスポーツを一緒にする上で、配慮しなければいけないことをこちらの目線で考えていたが、今回の研修で、実際に参加される方の声を生かす必要性を痛感した。
- ・障がい者に対しスポーツを楽しむことで豊かな人生を歩む事が出来るよう、身体的・精神的にサポートを継続してゆくには同じ目線を理解共有できるパートナーとしての信頼関係が相互に芽生えていなければ伝わらないと思う。
- ・スポーツは障害を持っていても持っていなくても、誰でも楽しめるものであると改めて実感することができた。障害者スポーツに限らず、スポーツのルールや方法を工夫することで年齢や男女差なども気にせず楽しめると思った。
- ・障害者スポーツに関するいろいろな団体や組織がオランダにあることを知り、日本にも同じような組織（特に個人をサポートする）があればよいと感じた。
- ・日本では、障害者に対する対応は遅れている。今でこそ障害者がスポーツを楽しめる時代になったが、まだまだ社会の受け入れができていない。オランダからの指導者の講演を聞き、まず、市は仕組みづくりから必要かと思った。施設等の課題は多いが、やれることから、クラブもしていきたい。
- ・障害者はどんな状況を体験することで実感することができた。ただ単に言葉などで聞いているだけではなく、実際に体験することで身近に感じることができ、またこれからの高齢化社会にもつながると思った。

変化はなかった（2 人）

2. 児童館での障害者スポーツ普及啓発ワークショップに参加して、指導者として役立ったことをお聞かせください。

- ・個々の子どもの能力に応じたサポートができればよいと今まで以上に強く思った。スポーツを楽しく、子どもの気持ちをリフレッシュさせるような指導ができればと思った。
- ・障害者の方の気持ちなり考えて接することが大事であることを再認識した。信頼が大事であると思う。
- ・相手の立場になって指導すること、何を必要としているか？また何が出来るのかを観察することなどを学んだ。

- ・人と人が向き合う時に大切なこと（相手の能力、その人自信を認め向き合う事務等）が障害者スポーツを普及していく上でも一番大切なことだということ。
- ・スポーツカウンセリングの導入期に緻密・繊細に十分時間を掛け、納得行くまで話し合いやレクチャーを進めていくことでその人の潜在能力や希望を探りながら個々人どんなことが出来るかを徹底して探るオランダの手法は参考にしていきたい。
- ・障害者の意見を元に参加方法や配慮すべき点を考えるということの大切さを学んだ。
- ・子どものニーズに合わせて工夫すること。（障害物を動かしたり、階段に明かりをつける）それで工夫したことをやってみて、うまくできているかを確認する。うまくいかなかったところは変更する。そして、新しいことを学んでいるか？成長しているか？確認する。うまくいかなかったら、何が変更できるか？を考え、進めていく。ということ学んだ。
- ・いろいろなスポーツを少し変化したり、工夫することで、障害者の方々にもスポーツを楽しんでいけることを学んだ。初めからできないと思うのではなく、少し工夫していけばできることが多いことに気づく。
- ・能力に焦点をあて、自分たちスタッフがいかにクリエイティブな発想力を持ち、工夫をするかが大切ということ。
- ・身近なものをクリエイティブに工夫することで同じスポーツの種目が何通りにも変化し、楽しめるものになるということ。

### 3. 特別支援学校での授業を見学した感想をお聞かせください。

- ・指導者のさりげないリードで、生徒が楽しくプレーしていることに感動した。
- ・体育館の「コーフボール」では、生徒が実際に体験し、3パターンのゲームをしたが、健常者と代わらない障害者とは思えないプレーをしており、障害のある人もない人も一緒に楽しめるのではないかと思った。
- ・障害を持っていても、ルールなど簡単に理解できることを生徒たちも理解してスポーツを楽しんでいることを感じた。
- ・生徒が積極的に活動していた。コーチの支持が明確でわかりやすかった。何より楽しそう良かった。
- ・個別のニーズに対応した授業を工夫していると思った。

### 4. 児童館での交流事業に参加して、指導者や子どもたちの様子などで気付いたことをお聞かせください。

- ・障害のある子もない子もちょっとした簡単なことを指導者がまず楽しんでリードすることで、楽しく遊んでいた。一緒に遊ばせようとするのではなく、同じ場にいることがまず大事だと思った。
- ・途中飽きていなくなる子はなく、障害のある子も一緒に同じ遊びをした。どの子も笑顔で楽しそうだった。気持ちよくすごせた体験ができたことが良かった。
- ・指導者：子ども達を楽しませるよう自らも参加型で指導していた姿が印象的だった。  
子ども：障害児も健常児も分け隔てなく、みんなが仲良く楽しんでいた。

- ・普段はあまり活発に動かない子も笑顔で動いていたので、いつもの放課後等デイサービスでは見られない様子が見られて良かった。
- ・障害者と健常者をつなぐとなっているが、ほぼつながれていなかった。疎外感をたっぷり感じていた。健常児も関わる様子もなく、仲間同士で遊んでいて交流なんてないし、大人も大勢いたが喋ったり写真を撮ることに夢中で子どもの支援をしようという気もないし、こちららが頼んでやっと見てくれたひともいたが。
- ・健常児と障害児との交流はあまり見られずグループに固まり、正直残念。
- ・まず健常児と障害児との交流はできていなかった。グループの中に両者ごちゃまぜにはいるようにするべき。健常児の人数が多すぎて仲良し同士で固まってしまった。せめて割合を半分ぐらいにするよう配慮したほうが良い。たくさん人数がいたので、子どもたちに声かけして交流を促す援助をもっとしても良いと感じた。

#### 5. オランダの専門家のお話で印象に残ったことを教えてください。

- ・「やりたいことがある。行きたいところがある。そのことが希望になり笑顔になる。そうすると、自分に自信がもてるようになる。」この話を聞いて、自信がつくことで毎日が楽しく過ごせ、次のステップにつながると思った。
- ・障害の程度、ある・なしに関わらず参加している人たちが笑顔でそれぞれがスポーツを楽しんでいる姿に感動し、垣根を作っているのは私たちなのだとすることを改めて感じた。
- ・「ルール・規則等に関係なく純粹にそのスポーツ・ゲームをやってみて楽しむことが大切！」という言葉
- ・「自閉症の子などに対して、一度に一つのことを教えることを心がける」という話。障害児だけに限らず、子どもにしっかりと物事を伝えるのにそれは大切なことだなと思いました。
- ・①1つの指導でたくさんのことを行わない ②障害者（児）が参加しやすい・楽しみやすいような工夫やグッズ（アイテム）の活用 は参考になった。
- ・スポーツカウンセリングの細やかさの実施状況。ヒアリングに掛ける時間（初動対応）を大切に、技術や技能の押付けはしない。
- ・障害に目を向けるのではなく、個々が何をできるのか？どんな能力があるのかを伸ばしてあげること。何が必要なのかを見極めることということが印象に残った。
- ・とにかく楽しむことが大切で、やってみて、確認をして、変更をして、それを行動にする。
- ・オランダの「MEE」という団体の活動内容について興味深く感じた。

#### 6. この事業に参加して今後の活動に活かしたいことを教えてください。

- ・現在もいろいろな子たちが遊びに来る児童館ですが、障害を持った子たちがもっともっと遊びに来やすい場所になるようにしていきたいと思った。
- ・今、障害者のダンス活動のお手伝いをしていることにつながられることや彼らとの対応の中でヒントがいろいろあったので実践に活かしていきたい。

- ・学童クラブでも子どもたちの能力に差がある中で、それぞれが楽しめるように、私たちがクリエイティブに身近なものを工夫することで遊びやイベントにふくらみをもたせられるようにしていきたい。
- ・指導活動の中で伝え方のバリエーションや引出しの量を常にチェック点検し対象に提供していく事。コーチや監督、インストラクターやティーチャーでもなくスポーツカウンセラーというポジションに興味を持ちました。
- ・人はひとりひとり違うので、まずは話をよく聞くこと。そして、本人のやりたいことや苦手だと思っていることを知ること。知った上で、その子のニーズに合わせて工夫していきたいと思った。
- ・子どもに接する際や遊びや行事で指導を行う際に、その子ども達にとってより最適な方法を取ることができるように意識して発言や行動を行っていきたくいです。
- ・障害者に偏見を持つのではなく、健常者もみんな同じと考えて、あるときは援助し、あるときは互いに助け合ったり、議論をしているいろいろなことを進めていけるようにしていきたい。
- ・数年前から障害者スポーツに関わる機会があり、何をすればよいのか？試行錯誤な部分があったが、今回の話を聞くことや体験することでコミュニケーションをもっととっていき健常者の人と垣根を越えて橋渡しができると感じた。
- ・障害者（児）向けスポーツやプログラムを児童館で実施
- ・健常者と障害者の割合を平等にしたらどうか。まだまだ障害児が健常児と交流を持つのは難しいと感じる。でも何回かやっていく価値はあると思う。
- ・地域緒事業間との連携)
- ・自分なりにどんな子にもできる活動、健常児と障害児が同じ空間にいられ、やってあげていると思われないようなことがあるのか、考えてみたい。意義はあるのか？
- ・健常者の方々にも障害のある人たちがいることを理解してもらえる機会をもっとつくっていきたくと思った。

#### 7. オランダ連携事業全体に関するご意見やご要望があればご記入ください。

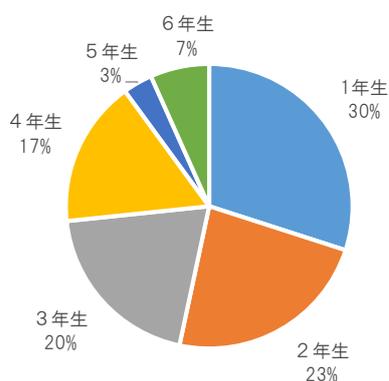
- ・非常に有意義でとても貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。（2名）
- ・またこういう機会があったら参加したいと思う。（2名）
- ・今後も参考にして行きたいので、事業継続に期待する。
- ・オランダの専門家の話を聞き、オリンピック・パラリンピックを控え、この機会に障害者に対する意識を変え、まずは仕組みづくりをしていくことが大事ではないかと思った。クラブでは、将来「コーフボール」を導入できたらと考えた。日本の玉入れのよう。高齢者は背がだんだん前かがみになるが、コーフボールで背伸びができるので良い種目。
- ・オランダの専門家の方が近くで話を聞いてくださり、寄り添っていただけたことに感謝。
- ・もう少し体験型の活動にしたほうがよいと感じた
- ・通訳の声が小さくて聞こえなかった。
- ・もっと知的障害児に配慮した活動を知りたい。大人同士の連携も欲しく、健常児に障害児の

ことを説明して仲間に入れてほしいと思った。オランダの方たちのご意見も聞きたい。指導者同士の交流が欲しい。

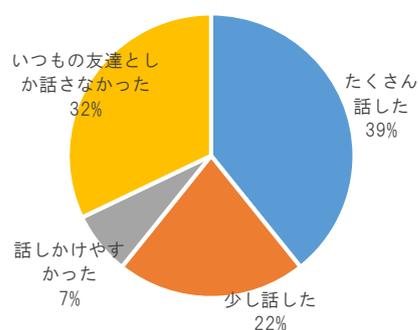
・何をどのように関わらせたいのかがわからなかった。結局、指示が通って理解できる子どもたちが楽しんでいた印象。どのように関わればパラスポーツを楽しめるのか、など何かアドバイスやヒントがもらえるのかと楽しみしていたが、結局支援員のサポートですごしていた印象。市の職員に障害児理解があるのか聞きたい。

### 子ども（回答 30 人）

#### 参加者



#### いつもは遊ばない友達とスポーツをして話げたか



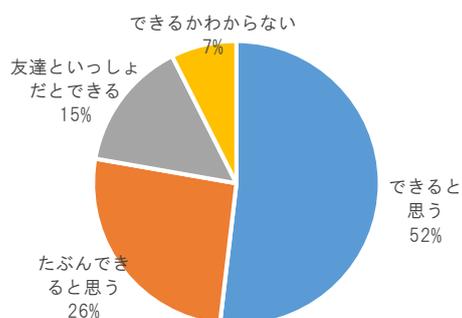
#### □イベントの楽しかったところ

- ・全部（18人）
- ・ボールをついて入れる（2人）
- ・広がってボールをキャッチ
- ・おにごっこ

#### □次はどんな遊びをしたいか

- ・バスケットボール（5人）
- ・ドッチボール（2人）
- ・卓球（2人）
- ・ボーリング（2人）
- ・ボール投げ
- ・おにごっこ（3人）
- ・こおりおに
- ・かけっこ
- ・かくれんぼ
- ・だるまさんのいちにち
- ・かたき
- ・パズル
- ・迷路
- ・サッカー
- ・野球
- ・なわとび、大縄

#### 他の場所でも、今日のようにみんなと一緒にスポーツができると思うか



#### オランダの人と話したか

